

シベリアの馬

ジャンパー

N・カラトシニコフ作
田嶋陽子訳

心の児童文学館



ア
の
馬
ジ
ャ
ン
パ
ー

田嶋陽子
N・カラー
シニョラ
作訳

テの馬
ジャンパー

田嶋陽子
N・カラー・シンコー
作訳

シベリアの馬ジャンパー

ニコラス・カラーシニコフ 作

田嶋陽子 訳

ぬぶん児童図書出版 1978

336P./23cm/A 5 判(心の児童文学館シリーズ 3)

小学中級以上～ 中学生

Nicholas Kalashnikoff : Jumper, 1944

心の児童文学館シリーズ 3

■シベリアの馬ジャンパー■ 定価1,400円

1978年6月24日 第1刷発行 ©

訳者 田嶋陽子

発行者 横浜市南区永田町1321

石井 満

発行所 〒101 東京都千代田区神田須田町1の18

共同ビル9F (株) マネージ内

株式会社 ぬぶん児童図書出版

電話 (03) 252-0026

印刷所 明和印刷株式会社

製本所 積信堂製本所

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

8397-103000-6602

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
老馬の死	馬は人間と同じだ	初夏の訪れ	醜い去勢馬	敵意	アシゲ	ぼくの名前はジャンパーだ	新しい世界	子馬の誕生	まえがき
.....									
88	76	71	59	53	41	29	24	9	7



19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
オオカミの襲撃 ^{しゅうげき}	クマの襲撃 ^{しゅうげき}	ジャンパーの愛 ^{あい}	競走 ^{きょうそう}	デニス少年をふりおとす.....	オゼロフ家のふたつの印 ^{しるし}	クリゲとの対決.....	残酷な戦い ^{ざんこく たたか}	アシゲよ、きみもか.....	母親との別れ.....
182	169	162	150	141	133	125	116	106	100



29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
ふたたび戦場へ	つかのまのしあわせ	死の退却	名誉の負傷	新しい主人	従軍日記	煙をはく怪物	徴発部隊	しのびよる戦争の影	赤ちゃんジャンパー
.....									
274	268	254	244	233	227	218	212	198	192



34	33	32	31	30
訳者あとがき	愛する家	故郷だ！	戦いの中で	ふたりの青年士官
.....				
331	320	309	294	279

表紙・装丁 横溝英一
 さしえ ビクター・G・アンブラス



まえがき

ジャンパーは、シベリアうまれの馬で、わたくしの友だちでした。

ジャンパーは、めったに見られないほどやさしくて、かしこくて、勇敢で、誠実で、人間の気持がよくわかる馬でした。人間でも動物でも、こんなに人からほめられたものはめったにいません。

わたくしたちが祖国のために戦っていたとき、運命が、さいわい、わたしたちをひきあわせてくれました。そのときもジャンパーは、すでに数人の主人たちに献身的につかえており、経験ゆたかなベテラン兵でした。それからわたくしにも同じようにつかえてくれました。そうかといって、ジャンパーがおかえしにほしがったものといえ、めんどろをみてもらうことと、少しばかりかわいがってもらうことでした。

わたくしは、心をこめてジャンパーの世話をしました。妻にすると同じようにジャンパーをたいせつにしたのです。

この話は、わたくしの思い出と、ジャンパーを愛していた人たちから聞いたことをもとにして書きました。これを書くことによって、わたくしは、ジャンパーだけでなく、たくさんの方たちにも、心の底から感謝の気持ちをささげたいと思います。その方たちは、なにもわからないまま、文句ひとついわないで人間がひき起こしたいたましい運命にまきこまれ、人間といっしょに苦しんできたからです。

Ⅰ 子馬の誕生

大地も空も、北国の冬の夜のうすあかりのなかで、ひっそりと静まりかえっていた。雪でまっ白におおわれた丘や森や広野を、いまではすっかりこおりつきじつと息をひそめている広大なバイカル湖を、星がはるか遠くの空から見おろしていた。煙突から舞いあがった火の粉が、夜空のあちこちに気ままに模様を描くと、もやのなかへ消えていった。カバンスク村の民家は、まっ白な雪の広野に黒いご石を並べでもしたように、くつきりと浮かびあがって見えた。あたりはまるでおとぎの国を絵にしたようだった。

ときどき静けさをやぶって、飢えたオオカミがえものを求める苦しい遠ぼえがきこえてきた。犬は興奮していつせいにほえたて、おれたちはちゃんと見張っているぞ、不意をうたれたりはいらないぞ、と襲撃者どもに警告をはっしていた。あとはもの音ひとつしなかった。



煙突の火の粉をのぞけば、どの家からもあかりひとつもれていなかった。その火の粉もみるみる活気がなくなっていた。シベリアの人たちは、たき木をむだには使わなかった。いつでも、夜どおし火をたいているようなことがあれば、それは氣まぐれからではなく、きつとなにかさし迫った必要があつたことなのだ。

どう見ても、村の人たちはみんな寝てしまったようだ。だが、ゲラシム・オゼロフの家の人たちはべつだった。オゼロフ家は、夜空に舞いあがる火の粉のせいで、村のまんなかでひときわめだっていた。火に新しく丸太をくべながら、じっと待っているのは、こともあろうに主人のゲラシムだった。ゲラシムは、たくましい体つきの農夫で、白髪まじりのふさふさしたあごひげをはやしていた。ゲラシムは

寝る気などさらさらなかった。心配でそれどころではなかった。

ゲラシムが氣に入っているかなり年とった黒いめす馬は、どう計算してみても、九日まえに子馬をうんでいなければならなかった。予定日から九日もたっていた。それなのにまだその氣配すらない。これはただごとではない。とりわけ、なにも食わず、見ためにも苦しんでいれらなさらだった。いつ近づいてもつらそうに息をし、まるで人間がうめいているようだ。それなのに、こちらがしてやれることはなにもなかった。そのうえやっかいなことに、寒さがきびしかった。馬小屋の床にわらをしきつめ、割れめは全部ふさいですきま風が入らないようにした。それでも、子馬がうまるときそこにいあわせないと、凍え死にされる危険があった。

ゲラシムは、なによりもそれをおそれていた。それで、ゲラシムか、そうでなければ家のだれかが一晩じゅう起きているのだ。

炉のそばに、ゲラシムとならんで、少年が腰をおろしていた。少年はねむそうな声で、馬の世話の仕方について書かれた大きな本を読んでいた。少年は、ゲラシムの息子のデニスで、としは十歳、片足がわるかった。腰かけているときでも、片足が短かいのがわかった。

ゲラシムは、うとうとしながらも、きき耳をたてていた。そのうちに腰をあげると、ランプを手にとり、あたたかい炉端をあとにめす馬のいる馬小屋へ行った。めす馬は、つつ立ったまま首をたれていた。

その腹は、とてつもなく大きくふくらんでいた。ゲラシムは、片手で馬の大きな腰をなでながら、首を横にふり、あごひげをすごいた。「ダワジャー、しんぼうするんだ。」とゲラシムはなぐさめるようにいった。

「神さまに万事おまかせするんだ。これ以上、おくれはしまい。さあ、子馬をうむんだ。いったいどうしたというんだ。はじめてのお産じやないじやないか。これまでだつてりっぱな子馬をたくさんうんでくれたろ。さあ、いい子になって、もう一度、わしたちをよろこばせてくれ。」

こうして動物が苦しんでいるのを見てみると、ゲラシムはなんともいえない無力感におそわれた。それというのも、ゲラシムは村の人たちから、牛や馬のことなら、なんでも知っている——独学だが——一流の獣医だと思われていたからだ。農民たちは、家畜がやかいた病氣にかかるとかならず助けを求めて、ゲラシムのところへやってきた。ゲラシムはいやな顔ひとつしなかった。お札にくれるちよつとした贈りものやウオッカはもらったが、金は受けとらなかった。これだけは、がんこにまもりとおした。村の人たちに重んじられるだけでじゅうぶんだ。ゲラシムは、病氣の家畜が一頭でもよくなれば、もうそれだけでひどくよろこんだし、死ねばしんだで、ひどく悲しんだ。

そんなとき、ゲラシムは学校を出ていないことをなげいた。正規の教育を受けた獣医にはかなわなかった。獣医たちは、うわさによれば、医者が人間にするような手術を動物にもして、奇蹟をおこなうと

いうではないか。

グラシムは、めす馬を見ているうちに、これまで、自分がぶつかった難産なんさんの例をいくつか思い出した。そうだ、どれもこれもうまくいったわけじゃない。お産がおくれること自体じたい、べつにめずらしいことでもない。だいたい、予定どおりにうめというのがおかしい。それにしても、九日もおくれるとは。しかもダワジャーのような年のいっためす馬となると……それが心配しんぱいのたねだった。

グラシムは、馬小屋を出ていくまえに、めす馬を診察しんさつした。ぬれた目をふいてやってから、馬の下にもぐりこんで腹はらに耳をあて、赤ん坊せうぼうの生きているあかしはないかと耳をすませた。なにか動いたんじゃないだろうか。それとも、なんだかそうだったように、ただ腹はらがごろごろなっているだけなのか。

ほんのわずかとはいえ、いくらか気が安まると、グラシムは家へもどった。少年は、いまにもねむりそうだったが、気をとりなおすと、本を手にとり、さっきのつづきを読みはじめた。その本には、『馬の飼かい方』という題名だいまいがついていた。グラシムの父親ちちが残のこしてくれたもので、グラシムはその本をほとんど全部そらでおぼえていた。

炉端ろばたに腰こしをおろしたグラシムは、少年がねむりそうな声で本を読むのをきいているうちに、ふっと暗い思いにおそわれた。ここにいるデニスは、うまれたときから片足かたあしが短かった。その足を見るたびにいつも、だれかの不注意でこうなったのだと胸むねがいたんだ。グラシムは農夫のうふらしいものの考え方でこんな